



カいは生まれたときから、貝殻をもっているの

生まれたときは、殻をもっていないカが多い

カいの仲間^{なかま}は、たいてい卵^{たまご}を産んでふえます。卵^{たまご}を産むときの様子^{ようす}は、カいの種類^{しゅるい}によってちがっています。いちばん多いのは、海水中^{かいすいちゅう}に卵^{たまご}をほうり出すやり方^{かた}ですが、たくさん^{たくさん}の卵^{たまご}をかたいふくろの中^{なか}に入れて産む^うとか、親^{おや}のカいの体内^{たいない}で少し育て^{そだ}ててから外へ出す^{そと}カいもいます。

海水中^{かいすいちゅう}に卵^{たまご}をほうり出す種類^{しゅるい}のカいでは、卵^{たまご}からかえったカいは、チョウの羽^{はね}のような膜^{まく}をもっていてひらひら泳ぐ^{およ}ものや、小さい^{ちい}つばに毛^けが生えた^はような形^{かたち}のものなど、種類^{しゅるい}によってさまざまな形^{かたち}の幼生^{ようせい}になります。幼生^{ようせい}には貝殻^{かいがら}はなく、どれも水^{みず}の中^{なか}を泳ぎまわ^{およ}ります。やがて、海底生活^{かいていせいかつ}をするようになると、小さな貝殻^{ちい かいがら}ができてきて、成長^{せいちょう}とともに貝殻^{かいがら}も大きくなり、親^{おや}と同じ貝殻^{おな かいがら}になっていきます。

生まれたときから、殻をもっているカいもいる

卵^{たまご}をふくろに入れて産む種類^{しゅるい}のカいの中には、ふくろの中で卵^{たまご}からかえって1か月^{げつ}ぐらいくらした^{あと}後^{から}、殻^{かた}のついた小さい^{ちい}カいの形^{かたち}で出てくるものもいます。イボニシのように、ふくろから、幼生^{ようせい}（プランクトン）で出てくる種類^{しゅるい}もいます。このカいの卵^{たまご}が入っていた^{はい}ふくろが、夜店^{よみせ}などで売られている「うみほうずき」です。

陸^{りく}にすむカいの仲間^{なかま}であるカタツムリは、卵^{たまご}からかえったとき殻^{から}をもっています。

タニシの仲間^{なかま}は、親^{おや}の体^{からだ}の中^{なか}で卵^{たまご}からかえり、外^{そと}に生まれてくるときには貝殻^{かいがら}をもっています。（監修・杉浦 宏）

